

方法についで の 覚書

アナキズムフラク活動と共産党フラク活動の

認識及び対照の相違について

一、

中央政府の政治権力が無能になるとか、自然的な大災害にままわれるとかすると、民衆はいつでも、その内部に奥深くひそんでいて平常は姿を見せないアナキスチックな創造力や相互扶助的な行動を始めるものである事は誰でも知っていることです。

僕もこんどの大津波で僕らの住む小さい町が大混乱におちいる寸前、我々町民が誰れの指図も受けないでやった土俵積みや、その他の仕事に示した創意や助け合いや、津波が引いたその翌日早々、ずうずうしくも収税可否の被害調査にやって来た地方事務所^の収税史に対する豆腐屋の丁経師屋のKさんなどという、平常は虫も殺さないほど保守的な人達の示した猛烈な憎悪や反抗―我々の若き同志がこれを組織して課税全免の団交にまで発展せしめんとしている最中に、左翼の県会町会議員共の目腐り見舞金の御持参と共に―火の消えたように消えていった。この感懐や行動にも、勿論その現れがあることはいなめません。又、同志山口英

君が「アナキズム」五号の中共革命の素晴しい分析―中兵^共の戦略戦術に先行して、すでに、将政権の無能力化と共に勃発した中国農民諸君の土地その他に対する自発的な革命組織が敵存したこと―にもこの事は如実に現われています。

従って、凡てがうまく行っているように外観は見える日常生活の中に於ても、吾々アナキストは民衆の肉の中に眠っている、この燃え木に火をつけ、この炭をどうしてもおこさなければなりません。

この過程の中に方法や組織の問題はあるのですが、その前にかんじんかなめの燃え木を発見し、それに火をつける当のアナキスト本人がナマヤサシイ熱源ではなく、みずから焼きつくす聖火をもつていなかったら、糞の役にも立たない事を、この前の舌たらずの論文で僕は示したつもりですから、本号では、その方法の問題へ少しくふれて見たいと思います。

二、

敬愛する土居夫人はアナキズムと現実とのズレをどうすべきかというテーマを出されました。僕もこれと同じテーマを夫人とは全く逆の立場から出して見たいと思います。つまり、政治的にも経済的にも倫理的にも、実に不安定極まりない日本の現実の中には、聰明な伴氏が指摘していられるように、政治的にも経済的にもアナキズムたる明確なる自覚はともなわ

ないが、少くとも我々の精神に通ずるアナキスチックな半組織や純然たる組織が、アナキズム思想に先行して、すでに蔽存している。従って觀念として浮いていない。眞の現実がすでに在り、それ故に聰明なる夫人のなやみとは全く逆なやみ。共産党とは全く異質的なフラク活動の新しい形式と表現とを見出しかねている。なやみをにあって、僕らはそれらの団体や個人に如何に働きかけるべきかという、いわゆる、思想が現実の後をどうして追いかかとう立場から、夫人と同じテーマを出すことを始めたいのです。

夫人が例として出された、アナキズムについて熱烈に語るが、失業状態に入ると「これを語ることさえ実感に程遠くなる」という労働者の状態は、僕らにとつては思想と現実とのズレとは見えないで、極く当り前の心理的事実としてしか受取れません。財布に一文も無くなると熱心に思想を語り、ちょっと、金廻りがよくなると会合にさえ顔を出さないアナキストと称する人を、僕らは見て来ますが、どちらの人の場合でも、生理的に云えば、その人達の細胞はその細胞組織の中で、最近代の生理学が極めてはっきりと実証している如く、アナキスチックな自由連帯運動をやっているからです。細胞組織が持つ時間と我々の時間との間に次元の相違があるにしても、一度アナキズムの聖火をあげた人の思想への関心の濃淡や高低は、久保氏が賢明にも凶星を指した如く、今後に於ける思想の波の隆起にまかせておけば良い問題のように思えます。

尚、人体細胞は偉大な細胞学者A・クァリアによれば、目的意識さえ持つてその連帯運動

をやっているという事ですし、又、ある賢人は来世紀は生物学の時代だと断言している位ですから、愚昧な政治学や厚顔な経済学がそろそろ墓場へ引つ込むのも、そう遠い将来の事ではないようです。だから、我々はまだ少し気長にやろうではありませんか。

三

そうした証拠はコロコロとコロガッテいると云っても誇張でないようです。蠟燭が消えんとする時バット明るくなるような、かかるガラクタ学問やその切売りの殷盛さの背後で、それらのガラクタとは何の関係もなく、庶民階級はその現実生活の中で、種々な組合活動を通じて、それらの学問がなんとかして持続を計っている資本主義的な経済政治機構の無言の實踐的批判をやっています。

しかもその実践人達の多くは、自分達の実践の意識を自覚している人はほとんどない有様です。労組は代議士への足場か、新しい国家権力獲得への道具位に心得られ、庶民金融組織はほんの一時の気安め位にしにしか受取られていません。アナキストの中でも山口英君のような聰明な人までが、特殊クラブ組織の反逆性や創造性に気づかず真つ向うからけなしつけています。(日本に於いてすらも福沢諭吉などの学術的クラブ活動の封建勢力に対する反逆性と、資本主義文化発達に対する創造的役割は認めざるを得ないし、米國一八五〇年以後の

体操クラブの革命的 성격や、近代英国に於ける特に自然科学上の發明発見の八割以上が、この同好者のクラブ活動の所産であつて、国家機関や整備のある大学界の所産でなかつた事実、及び、この事が人類文化は、労働からか、遊戯からか、即ち、あれか、これかの問題へ發展する重大問題をはらんでいるためここでは割愛しなければなりません。

又、サンジカリズムについても、それを良く知っている人達が本来ならば、その批判をやらなければならぬのにやっていないし、従つて、サンジカの父バクレーニン批判するカミュにお株をとられた形ですし、勿論、キェルケゴオルの組合論などはかつて聞いたこともないと云う有様、まして金融組合運動に至つては全く馬耳東風です。僕の知っている中でこの問題に関心を示したのは、昔では上田杏村、最近では伴氏、大沢君と僕の若い同志戸田君だけです。

これらの貧困が何によるかと云えば、僕の考えでは、現実に対する哲学的省察のひどい不足です。

キェルケゴオルは組合を論じて、数を以て自己を主張しようとする場合でも、一人が一人として通用する場合と同様に、必ず孤独が登場すると断定し、「このことを組合は認証することは出来ないし、認めないであろう」が、一人であろうが十万人であろうが、いずれでも同じことだというのは「高い権力に対して彼らが意味をもっているという感じを抱きたいため」だから、それ故に「組合精神は彼らが獲得しようとして努力している精神に於て革命的

であると同時に、その原理においても革命的なのである」――「無数の組合の存在は、時代の筋帯が解けたのであり、その解体を促進するために役立つのである。組合は国家といふ有機体の中に在る油虫類であつて、即ち、母体は解体の途上にあることを立証する。

ギリシヤに於て秘密同盟クラブが一般に広まったのは何時頃であろうか、国家が解体の危機にのぞんだ時ではなかつたか」（あれかこれか二九二頁）と一寸違った方向から組合を取扱つています。

レーニンはこの事―組合か、国家か―即ちあれか、これかの意義をよく呑み込んでいました。それ故、彼はあらゆるサンジカの芽をつむ警告を党に発し、組合を今は諸君が見るよう完全に骨抜きドジョウにして、国家権力の犠牲にしてみました。だから共産党の小僧共がメガホンもどきに、うゝん、組合主義か―と鼻であしらう、あの調子は、奴さん達には非はないが、逆の意味では正しいのです。吾々は一言で全体を喝破するこうした言葉すら持っています。おまけに、この集団主義のお祭りさわぎと日本の経済的貧困と来ています。

これらのからみ合いの真只中で、現象的な夢を見ている組合人に、組合の現実性に気づかせ、現実的立場を与えることは、ちょっとやさそつとの努力では問題になりません。我々はこのことを肝に銘じなければなりません。

而し、危機にのぞむと勇氣百倍する傾向を持つ人物が実在することを信じ、又、もう一つには、組合を代議士への足場とする、ツールズ大会以後に現われ始めた政治的変ぼうと、最近ホルドリーのサンジカリストが始めたゼネストの、長い間に於ける真の現実の組合の仕事の研究する時、僕らは組合の政治的変ぼうは単なる一病的現象であって、日常的には、常に、組合は組合本来の機能を、国家とはするどい対立を内面に於て示しながらやって来たことを知るのです。

日本に於いてすらも、組合は外面的には代議士への足場になっていますが、内面的には、即ち、日々生起する実際の現象面では、組合は何をやっているのでしょうか。

先づ第一に彼らは諸君の知っているように、なんの奇もなき直接の金を要しない医療設備をもっている。大きな病院をすら持っている。庶民階級の家庭よりは余程安い栄養を考えた食堂を持っている。第二には職場消費組合を持たない組合では、市場値段より確かに安い月賦販売組織を持つ。第三には靴作りや修繕を職場仕事（ジョブ）の片手間にお話にならない有る時払いの賃銀でやっているような労働者が、かならず何処の組合内にもいる。第四には組合員が何かで罹災したりすると組合救済委員会が直ちに作られる。彼らは国家の役人や民生保護など

とは全く逆の立場―困っている方をかばうことを強調する―立場からその委員は慰問や調査にやって来る。若し被害がひどい場合には、早速、同一産業全体に向ってカンパ運動がなされる。

僕の若い同志はこんど水害で、赤ん坊の着物やおむつまでカンパして貰ったという始末です。

書けぬ（な）きりが無いから止めますが、これこそ組合活動の生きた現実そのままの姿です。余りにあり来りの事ばかりなると、組合の政党支持運動のごとき華やかさが無いために、これらの地味な真の現実的機能は実に多く見のがされ勝ちです。

（この論文の本意は伴氏が暗示された庶民金融活動の活きた実にアナキスチックな組織運動の実例を示して、所論を発展さす積りの処、止むを得ざる障害のため、結論だけで、一先づ打ち切らなければならなくなりました。悪しからず）

（一九五四年一月）

△組織の問題を何処へ連れて行くべきか▽を載せた△アナキズム七号▽に土居貞子の「思想と現実の間隙をどうしてうずめるか」が書かれていた。それは――

「・・・何故にアナキズム運動がのびないのか、少数の人たちの孤立的な思想としてとどまり現実的な力になりえないのか。

思想そのものの内在に欠かんがあるのか、その宣伝方法がまちがっているのか。

・・・大杉栄ですら「アナキズムは孤独な思想であり、これをもちつづけることは苦しい。誰かアナキズムの思想を小気味よく粉々葉微塵に打ち破ってくれ。アナキズムがまちがいであることが証明さえすれば、自分はこの苦しい孤独な思想をもちつづけはしない。

と言う意味のことを書いていた。・・・

私の周囲の数名の労働者はアナキズムについて語るとき、感激をもって実に美しい純粹な思想だと言い同志意識をもって語る。けれども現実の問題はこれでは一歩もかたづけかない、力にならないと思うのである。・・・

実際、大杉の言葉通り、私自身アナキズムの重さを感じ誰かいさぎよく粉々葉微塵に粉砕してくればよいと思う程である。・・・」

これに触発されて、小川のこの論文は、アナキズム七号の諸論文を視野に入れて書かれ、八号に掲載されたものである。なお八号の諸論文は、ほとんど七号の内容を問題にしている。